



「老いの苦農」から 「老い楽の農」へ

木村 迪夫

今年の春から夏場にかけての農作業は，“坐していっぷく”などの余裕のまるでないシーズンとなってしまった。

暖冬，春早々の異常気象がもたらした結果である。

サクランボやプラムの開花は，例年ならば4月の下旬から5月の初旬にかけてなのだが，今年は何と，4月の中旬に満開期となってしまった。

それゆえ，5月の田植えが終わって，ぶどうのジベ処理，6月中中旬に入ってサクランボの主流品種佐藤錦の収穫・出荷といくのだが，その作業工程に隙間がなくなり，場合によっては，田植えを終えない前にジベ処理作業，ジベ処理を終える前にサクランボの収穫作業を，という勢いであった。息つく暇もなく，という表現がピッタリである。老農の域に入ってしまった私ら夫婦には，実に厳しいシーズンである。

幸いに，5月末の何日間かの低温が，季節の走りを少しばかり柔らげてくれ，農作業の逆転もなくて済んだ。しかし尻に火が付いたごとく，気候の走りに追い立てられた作物の進み具合は，大きくは変わらない。

気候の走り，季節の走りが，結果としては農作業に好影響をもたらした，ということになろうか。稲の分けつ本数は，例年より随分と多めで，農業改良普及センターでは，早々と，6月も25日頃には“中干しをしる”との

指示広報を伝えている。

サクランボもプラムの着果も良好この上ない。サクランボは，昨年に続いて2年連続の豊作である。天童や東根市といった主産地をさておいて，我が上山市は県内一の大豊作と報じられている。

大豊作は良しとして，価格の低迷には落胆した。需要と供給の関係は，自由経済の大原則か。不景気で荷の動きが鈍いのでは—，とは市場の弁。

あげくの果てには，着色がままならない。いつまで経っても，あの鮮紅色，濃紅色のあの色が来ないのだ。佐藤錦はまあまあとしても，晩生種の大將錦は，ついに樹の上で捨ててしまった。原因は，これまた異常気象のせいである。

果物にとっては，昼と夜との温度の変化こそが，決め手となる。昼と夜との温度の格差こそが良質の果物を生み出す。それが今年は，夜になっても温度が下がらない。のべつ高温の推移では，果物の熟化が妨げられることを，百姓ならば誰でも知っていることだ。

プラムにいたっては，ここ何年もの不作を挽回するように，成りに成った。あげくの果ては，着果過多。摘果作業では，指の差し入れる隙間もないほどの成りようである。必死になって摘果作業をしたものの，いかんせん「老いの苦農」になりつつある私ら夫婦にとっては，他の農作業ともかち合って，ついに十分な摘果が出来ず，結果は小玉の鈴成りとなってしまった。残念しごく。

ぶどうはどうか。わが家のデラウエアは，この春おおかたの面積を伐り倒した。

「仕事が大切か，病後の躰が大切か」と女房に迫られてのことであった。30年もの年月，手塩にかけて育ててきたデラウエア，わが子の首を切るような思いであった。それでも以前の面積の三分の一は残っている。収穫は多分お盆前になるだろう。

露地ものの我が家のぶどうはさておき，今

どき出荷時期を迎えているハウスものの価格は、「無惨」なほど低価格とか。

後継者なしの女房と二人だけの「老いの苦農」になってしまった、この夏。

二人とも息切れる思いを払拭しての頑張りですが、今日も続く。

これからは歳相応に「老い楽の農」を目指したいものである。それもこれも私の決断次第だ、と女房は言う。

この辺で、意を決して、今までひたすらに経営規模の拡大だけを目指し、「前進あるのみ」と突進してきた姿勢を修正し、規模縮小へと方向転換すべき時期なのであろうか。さすれば「老い楽の農」を地で行くがごとく、たまには女房と二人、あるいは老人クラブの仲間たちと共に温泉に浸かりながら、カラオケに興じることも出来ようというもの。

(山形県上山市・農業)

愛媛、無茶々園より

片山 元治

始めまして、私は無茶々園の片山元治と申します。

愛媛の西南部、明浜町で85名の仲間と共に、有機農業でミカン栽培を主宰し、足掛け30年になろうとしています。異常気象が当たり前になってきたこの10年あまり、全園を有機栽培するのがなかなか難しくなってきました。

この度、駐村研究員をやらせて貰うことになり、頑張りたいと思いますので、宜しくお願い致します。

無茶々園は、有機農業を通してムラ作りをやるうとする運動体と位置付けています。私達はこの30年間、何で田舎で生きようとして

いるのか、田舎で生きる良さは何なのか、ズーッと問い続けてきました。

それは、都市と一步距離を置いて、自然の中で大地と共に心を耕し清楚に生きる事だと思いました。つまり、社会インフラを充実して、都市ほど金が取れなくても楽しく生きていける地域社会を作ることです。

農薬は農の薬と思って使っていたものが、命あるもの全ての毒薬である事を知り、その害が遺伝子レベルまで深刻化してきている現状を感じつつ、健康で安心して食べる事の出来る食べ物をどのように作っていくか、食べる人はその価値を本当に感じているのか、毎日考えさせられる日々です。

日本で唯一、まだ現役である急峻な段畑、傾斜地柑橘農業、私達の周りにも、あちこちに荒れたミカン畑が見え始めました。

農家の作った食べ物の半分以上を消費者が直接料理して食べなくなり、市場が集荷機能を失いつつあり、株式会社が簡単に農地の所有が出来るようになり、農協が改革なきは解体、という事態にまで追いこまれ、今や、グローバル化の中で日本農業は行き先を見失い、多くの農家が、子供に後を継がすのを忌み嫌い、農家は元気に生きるための食べ物を生産している尊さを忘れ、安いものばかり作られ、世紀末の体さえも伺えるような時代に入ったという実感です。

そんな中で、息子が、「父ちゃん後を継いでもええぞ」と言った瞬間、「それでこそ男じゃ」とオダテテ農業を継がせてしまいました。可愛い子には苦勞をさせれと昔の偉い人が言いましたが、そんな暢気に構えておってよいものじゃるか、と内心ふと思う時があります。

ある人が、農業の世界に平成の文明開化が起き始めた、と表現しましたが、勤皇の志士になるのか、会津の白虎隊になるのか、本当に紙一重の差ではないでしょうか。いずれにしても、イサギヨク生きれ！アキラメルナ！、というだけです。農業分野ではいろんな常識